

Interview

Eddie Jobson

エディ・ジョブソン ● インタビュー

シンプルなセットながら、往年のサウンドも再現していたエディ。ここからはその舞台裏から、過去に語られることのなかった秘話をお届けしよう。

新しいアプローチを見つけて
70年代のプログレにならないようにすることが
UKZのチャレンジなんだ

優秀なアシスタントのおかげで 安心してソフトシンセを使えるよ

●今回の来日公演では、ハードシンセではなくソフトシンセで音を出していたんですか？

●そうだよ。バイオリンの音も、エフェクトも2台のアップルMacBook Proで鳴らしていたんだ。

●あなたのトレードマークである、あの「アラスカ」のイントロで聴けたヤマハCS-80の音も？

●もちろん、アトリアCS-80Vで頑張ったからね！CS-80Vだけだとちょっと薄っぺらいから、そこにスペクトラソニックスOmnisphereの音を加えてオリジナルにかなり迫った音にすることができたんだ。オルガンの音もかなり良いんじゃないかな。あれはネイティブ インストゥルメンツのB4を使ったよ。ほかにもピアノは同社のAkoustik Pianoだし、シンセにはアトリアMinimoog Vも使った。ヤマハCP-70の音は、アップルLogic搭載のEXS24でサンプルを鳴らしたよ。

●でも、ライブでソフトシンセを使う不安はありませんでしたか？

●確かにかなりリスクはあるよね。プログラムの切り替えを頻繁にしないといけないし、僕は、LogicのMainStageを使っているんだけど、これはとてもいいプログラムなんだよ。キーボードの splitted・ポイ

ントがフローティングになっているから、Minimoogの音で下降しても、ピアノの音で上昇してもスプリットが追いかけてくる。でも、Minimoogのパートを弾いてからピアノ・ソロを弾いて上昇するとき、途中でMinimoogの音になってしまうか心配になってくるけどね(笑)。ペダルもすべてプログラムされていて、フィルターが通っている場合もあれば、ピッチベンドになっている場合もあるから、しかるべきタイミングでスイッチを押さないといけないんだよ。でも僕の優秀なアシスタントのハンズがいるから安心できるというのもあるね。

●キーボード・スタンドも素晴らしいです。ハモンドC-3みたいですね。

●実はあれ、ハリボテなんだ(笑)。1月にニューヨークでUKZのデビュー コンサートをやったときは、ジェスロ タル・ツアー時のキーボード スタンドを使ったんだ。コントローラーは、僕が25年間使っていたSynclavierと同じキーボードのシーケンシャル・サーキットProphet T8だったんだけど、全部の重さが2,500ポンド(約1.1トン)もあって、しかもたった1回のコンサートのために輸送費が5,500ドル(約55万円)もかかったんだ(笑)。それで、これからはもっと軽くて持ち運びしやすい機材にしないといけないとハンズに言われて、Prophet T8を使うのはやめることにしたよ。ちょうどそのころ、テキサスのインフ

ニットレスポンスという会社が、折り畳み式のキーボードVAX77を作っていてね。重さも25ポンド(約11キロ)しかないんで、手荷物として飛行機に乗せられる。ところが、今回のツアーに間に合わなかったから、コルグM50を借りて、もう1台のCMEはライブ前日に東京で買ったんだよ。だから、どちらのキーボードも僕にとっては新しいものだった。スタンドも、オン・ステージ スタンドのZ型モデルを買ったしね。そして、初日にハンズがスーツケースに入れて持って来た黒の発砲スチロールをスタンドの周りに取り付けてあのスタンドを作ったんだ。

●そうだったんですね。あと気になったのは、「テーマ・オブ・シークレット」のピンポン玉の音。あれはサンプリングですか？

●いや、Synclavierで打ち込んだんだ。キーボードの鍵盤じゃなくて、コンピューターのキーボードで1つ1つね。ピッチもタイミングも、すべてプログラムでコード化したんだ。いわゆる拍はなくて、弾む物体の物理的特性が元になっている。打ち込むのに2週間かかったよ。1つ1つの振幅とボリュームを正確に表わさないと、弾むたびに物体が軽くなるように聴こえてしまうからね。ザッパのポリリズムとは違って、物理の法則に則って作っていったんだ。でも、一度プログラムが出来上がると、ピッチを変えてほかの曲に応用することができたところが良かったね。